

夫婦お互いが幸せに生きるために

飯長 喜一郎

はじめに

「子育てと夫婦の連携」シリーズも、今回で最終回ということである。今回はカウンセリングを専門とする一方、育児と家族関係のいくつかの研究に携わってきた立場から、このテーマについて考えてみたい。私は研究者、実践家であると同時に二人の娘の父親でもあり、また夫婦の一方の当事者でもある。そういう経

験もふまえて考えてみたい。

一、子育てとは何か

何とも妙な小見出しとお思いだろう。いまさら「子育て」を定義づける必要などあるのだろうか。しかし、考えてみるとけっこう考え方にバリエーションがあるものである。

そしてこの問題は育児に関する夫婦の連携を考えると、無視できない問題なのである。

ある研究で、育児の夫婦間の分担を調べようとしたとき、途中で変なことに気がついた。それまでは、「次のことをご主人は手伝ってくれますか」という質問で、「おふろにいれる」「授乳する」「おむつをかえる」などをあげていた。この質問の仕方が、ある価値観に染まっ
ていて、しかも不十分であることに気がついたのである。

「手伝ってくださいますか」というのは、育児は母親が担うのが当然で、父親はそれを手伝うにすぎないという、研究者側の無意識の価値観を反映していることに気づいたのである。また、その後の項目は行動の大きな広がりを持つ育児を、ごく限られた個別の行為のみで代表させようとした姿勢のあらわれでもあったのである。

「子育てとは何か」と、今一度問いなおしてみれば、それは個別の身近な育児行為にとどまらず、子どもを育て

ることに付随する諸々の行動すべてが含まれると考える必要が、あるのではないだろうか。つまり、先ほどの例のような道具的な行動以外にも、「ほめる」「しかる」「かわいがる」というような情動的な関係、「子どものための計画をたてる」「調べる」「夫婦で話し合う」などの間接的な行動も「子育て」の重要な側面なのである。むしろ、夫婦の一方が他方を精神的に支えるのもそれららうちに入ると思われる。

二、子育てにおける夫婦の連携のさまざまな様態

子育てにおける夫婦の連携のありようはまことに千差万別である。古典的には、母親がほとんどの育児を担っており、父親は家計をささえるために働くというタイプである。ちょっと考えるとこれは当たり前
の形態なのであるが、実はそうでもないのではないか。父親が主たる生計支持者であるというのはサラリーマン家庭と職人の家庭くらいにあてはまるのであり、商家や農家ではそうとは言えない。商家や農家では一家総出で働くのであ

り、そのような家では母親は第一養育者ではあっても、程度の差はあれ、育児はその他の家族も担うものである。祖父母が第一養育者であることもある。

商家や農家は共働き家族の一種でもあるが、その他にももちろん多くの共働きのサラリーマン家庭がある。成人の女性の中では働いている女性の方が今や多数である。共働きと言っても余りにも多様であり、一口でその特徴を言い表すことができない。私がメンバーとして参加した「子どもの発達と父親の役割」研究会では、「週に五日以上、三〇時間以上」働いている母親はフルタイムで働いているものとみなした。それ以下がパートタイムというわけである。

多くの家族においては第一養育者が母親であり、父親がそれに「協力」する。その協力のあり方がさまざまなのである。

〈役割分担〉

育児というものを先ほどのように大きくとらえた場

合、その性質によって二種類に分けることができる。一つは子どもに対する具体的な働きかけ（役割）であり、今一つはもっと抽象的な役割である。抽象的な役割とは大きな指針を決めたり計画をたてたり情緒的に支えたりする役割のことである。

そして、具体的な役割は日常的に母親が担い、抽象的な役割は父親が担う、と言われがちである。

しかし、そんなにステレオタイプに考えてしまつて良いものではないだろう。人間はさまざまである。細々と気がつき子どもにあれこれ世話を焼く父親がいても良いし、ドンと構えて動じず家の重大な決定には主導権を發揮する母親がいても良いのではないだろうか。また、似た者夫婦で、それぞれ半分ずつ背負っているカップルもあるだろう。

二種類の役割は、要は機能の問題であり、誰かがどちらかの役割を固定的に果たさなければならぬというものではない。

ただこのことは重要である。つまり、どのような役割

分担でも良いけれども、自己矛盾を抱えていないことが大切である。「なぜ私が毎日こんなわずらわしい子育てをしなければならぬのだろう」と思いながら妻が子どもめんどうを見ていたり、逆に夫が優柔不断な性格であるにも関わらず「沽券に関わる」とばかり妻の方針に反対ばかりしては、不幸である。

三、健康な連携

子育てに関してのみならず、夫婦の健康な連携とはお互いの果たす役割を認め、かつ、自分自身も自らの役割を受け入れていることであると考える。しかし、言うは易く行うは難しである。互いに違う個人史を持っている夫婦が理解し合い、時には自己変革して新しい役割関係を創造しなければならぬのである。変化には痛みが伴う。

〈変化の痛みの個人的経験〉

私自身のことか思い出される。

私は、かつて今も共稼ぎである。私自身は共稼ぎの両親のもとで育った。また、いわゆる戦後民主主義を純粹に教育された。そのためかどうか、自分では「男は〇〇で、女は〇〇」という考えには立っていなかった。一時はそういう自分が周りの同級生と考えが違うようで悩んだほどである。

忙しくないうちは、自分の建前で生活できた。結婚してから三年間は大学院生であったので、暇な日には家事を一通り済ませて妻の帰りを待っていた。また、仕事を持ってからすぐに長女が生まれたが、最初のうちは暇が多かったので、我ながらスムーズに行くと感じていた。誰にも言われなくても家事育児を分担してやることができ、建前と本音に矛盾があまりなくてすんだ。家事育児を楽しんでもいた。我ながらうまく行っていると少しばかりの自負心があった。

しかし、悩まずにすんだのはそのころまでだった。

次第に私の仕事が増えてきた。予定がつまりはじめ、思うように分担がうまく行かなくなってきた。些細なこ

とだが、調整に苦勞がいるようになってきた。誰が保育園に迎えに行くか、とか、夕飯の準備をどっちがするかとか。

忙しいときに限って子どもが風邪をひいたりもした。

どちらが仕事を休むかでもめた。知らず知らずのうちに、自分は休めないと主張するようになっていた。そういう時には、相手の都合を斟酌するゆとりがなかった。

「私だって仕事をしているのよ!」と、妻が大きな声を出さないと、相手も仕事上の都合を持っていることに気づかない始末であった。

そういう時には、いつも妙な気持ちになった。いらだち、驚き、恥ずかしさが生じた。自分の思い通りにならないからだち、相手もそんなに休みにくいのかという驚き、そしてそんな簡単なことに気づかなかった恥ずかしさ。いろんな感情が瞬間的に渦巻いた。喧嘩になったときもあった。しかし多くは話し合って調整することができた。

こう書くとは簡単なことのようにであるが、実際には、結

構、一触即発的な状況だった。そんなことが数限りなくあった。「その日は」どっちの仕事が大切か」ということを、始終考えさせられた。

「共働きでなければ、こんな思いをしなくてもすむのになあ」と思うこともしばしばであった。

結局のところ、自分の中の「男女同権意識」は、薄っぺらな意識でしかなかったと気づかされ通しであった。

表面の薄い意識ははがれやすく、すぐに本音がでた。自分でも気づいていなかった本音である。仕事で勝負するのは男であり、女は育児の主人公だとする思想がいかに頑固に染みついていくか、思い知らされてきた。

今でもその思いとの格闘は続いている。少し大げさに言えば、自分が生きていく限り続くテーマのひとつでないかとさえ思っている。

私わがわが家なりの家事育児の分担を妻と作り上げてくるまでには、自分の中の本音と建前の中身や割合を変化させてこなければならなかった。それは私一人で行うにはきつすぎる作業であった。妻が意図すると否にかか

わらず、妻から突きつけられた課題への答えを探る中で
否応なしにしなければならなかった作業であった。そう
いう意味で、二人でこそ行うことのできる作業であっ
た。



四、子育てと夫婦の連携

育児には間接的な作業の部分もあることはさきに少し
ふれたが、目に見えるのは何と言っても毎日のこまごま
した仕事である。だから、かえってそこで本音が出やす
い。本音と本音のぶつかりあいになりやすい。このぶつ
かりあいを、ともかく避けたいと思ったり、一方が他方
を言いまかす機会にしたいと思っいては、不幸であ
る。

現代は男性と女性の役割分業観が変化しつつある時代
であり、特に男性の価値観の変化が求められている。そ
のため、夫と妻とが議論する場合には、夫の方に価値観
の再検討が求められがちである。

そうは言っても、夫と妻とが運命共同体として一つの
家族として生きて行くのであるから、夫のみでこの問題
に対処する訳には行かない。二人の共通の問題として考
えていく必要がある。妻としては問題の解決を夫のみの
責任にして良いとは思われないのである。

男らしさ女らしさという。そして、ややもすると夫だけでなく、妻の方も型どおりの決まりきった男性像を夫に期待しているのではないか。

〈強くない夫〉

子どもの相談からうかがえる夫像は、どちらかと言うと自信のなさそうな姿である。子どもの悩みと言うのはほとんどすべての場合、親の側に何らかの思い直しが要求される。子どもも親、自分親、人生親など多くの価値観を再検討しなければならなくなる。カウンセラーは特にそのことを要求するわけではないし、子どもの問題の多数が親の側の大きな問題を伴うとも限らない。しかし、実際には好むと好まざるとに関わらず、子どもについて意外に多くのことを考えるようになる。

子どもの相談にこられる親のほとんどが母親である。その母親を通じて見えてくる父親(夫)には、三つのパターンがあるように思える(夫婦共同で子どもの問題を考えようとするタイプをのぞく)。

① 無関心型

「子どものことはおまえに任せているのだから、おまえの好きなようにしたら良い」と、妻に任せている。「だから子どものことはおまえの責任だ」と発展することもある。

② 興奮型

ふだんはあまり子どもの問題にふれようとしませんが、時にはカーッととなって子どもに当たったりする。暴力をふるうこともある。

③ 逃避型

問題に直面しようとしめない。問題の存在すら認めようとしめない。

このようなパターン化は目新しいものではない。そして私は、かつてはこのような父親に対して批判的な目を持っていたことを否定しない。

父親は(仕事で忙しいという言い訳を考慮にいられたとしても)子どもの問題から目をそむけがちであり、母親

が一人で子育ての問題を背負わなければならないということに憤りを感じることをさえあつた。

しかし、このごろでは、このことは男が生き方を再検討しなければならぬ作業の大変さをあらわしているとも思うようになった。そして女性の方は差別されてきた歴史を背負っているだけに、少し早く問題に直面しているのではないか、さらに言えば、女性の方が変革への勇氣を持っているのではないかと思うようになったのである。

そう考えると、ただ男性を責めても非生産的である。むしろ、男性をどうしたら問題に向かわせることができるかということを考える必要があるのではないか。

いささか男性びいきの言い方になってしまったようである。しかし、「夫婦の連携」という錦の御旗を押し立てたところで問題は解決しない。生き方の根本に関わるかもしれないテーマを内包しているからこそ、育児について夫婦が語り合い、自分たちカップルのやり方を創造していく、そういう少し苦しい、時としてつらい、しか

し、変化の喜びの可能性を秘めた試みに向かって行ってほしいと思うのである。

おわりに

子育てと夫婦の連携という問題を考えるとき、ともすると、理想的な姿を提唱しがちになる。理想はそれとして意義があるかもしれない。しかし、現実には理想通りには行かない。行かないばかりか、何とも情けない「連携」になってしまいがちである。それでも良いではないだろうか。それが現実であれば、そこから出発したら良い。ただ、変わることへの勇氣だけは持ちたいものだと思う。そして、相手も変わりたいと思っている、もっと言えば、もっと幸せに生きたいと思っているということ、大切にしたいものである。

(お茶の水女子大学)

*このシリーズは、今回で終了いたします(編集部)